
世界の闇

giallo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の闇

【Nコード】

N6115J

【作者名】

gallo

【あらすじ】

人、動物、植物、あらゆる生物には《闇》という謎の粒子を持っていることが判明された。《闇》は生物に異常な力を与えた獣は巨大化し人を喰らう化け物になり植物もまた巨大化し人を喰らう、そして人もまた……。

0 - 1 異能者（シュケル）

「はあはあ」

一人の中学生ぐらいの少年が走る。何かから逃げるように

「化け物にみんなが……！」
クリーチャー

グルルルル

少年は振り返ると鼠が大きくなったような生物がいた……
・赤い液体が口や前足についていた。

「ひいつ」

むつとするような臭い……血

鼠の化け物が走りだす……少年目掛けて

「くるな、くるな、うわああああああ」

少年は目を閉じた。

ザシユユユ！

「命を喰らい尽くせ！」

少年は何かで斬った時の音と声を聞き恐る恐る目を開けた。

血まみれの仮面を被った黒ずくめの服装の人が立っていた・・・
鼠の化け物はいない

3

「こちらディシクレイト、《ラット》を一体喰った。民間人が一人いる・・・ああ、わかったすぐに向かう」

誰かと交信していた。少年には仮面を被っていてどんな素顔かはわからなかったがその人が何なのかわかった・・・

・・・
シユケル
異能者

「おい、お前」

「はい」

「今から軍の奴らが保護してくれるはずだ。ここを決して動くな、死にたくなければな！」

黒ずくめの人はそう言って走り去った。

0 - 2 〆

ザシユユ!

「命を喰らい尽くせ!」

三匹目の《ラット》を喰った

「これで全部か?.....わかった帰還する」

仮面の黒ずくめの人は歩きはじめた、『ある場所』へ

『ある場所』.....化け物殲滅組織・ロスト

「お疲れい!デイスは何匹狩った?オレっちは今回は五匹も狩ったぜ」

もう一人陽気な仮面黒ずくめが増えた

「俺のところは三匹いた.....最近、出現頻度が高いな」

「そうだね、何度も出撃しなきゃいけないこっちの身にもなってほしいよ」

仮面の黒ずくめ二人はロストに着き中へ入った

「いや、やっとこの鬱陶しい仮面を外せるよ」

「しかたないだろ、素顔がばれて困るのは俺達だからな」

二人は奥の方に入っていき自分の部屋へ向かっていった

「んじゃ、またあとでな」

「ああ、じゃあな」

部屋へ入った。六畳の個室ごちゃごちゃせず綺麗に掃除されている

仮面、黒ずくめの服をすべて脱いでパイプ型のベッドに仰向けに寝転がった・・・

俺の名は・・・ディシクレイト親しい奴にはデイスと呼ばれている。

ここロストは化け物を殲滅するための人材が集まっている・・・
・その人材のほとんどが異能者^{シユケル}・・・

世界に突如出現した化け物・・・クリーチャー・・・こいつらは人や生き物を喰う性質をもっている・・・ただの生物ならこれはただの食物連鎖で終わるのだがこいつらは謎の結合体《闇》でできている。この《闇》は生きた細胞のように見えるのだが生き物ではない、という科学的説明がどこかの御偉い学者さんが最近公表された。

《闇》はあらゆる生物に宿っている。人しかり鼠しかり・・・普通は感知できないほど微量の《闇》しかもたないのだが特別多く《闇》を持った人間を異能者・シユケルと呼ばれている

シユケル・・・異能者と呼ばれるには理由がある・・・《闇》は多くもつことにより身体能力の向上、魔法のような『力』をもつ・・・これが主な所以だ。

異能者レベルの《闇》保持者以外の一般人には生物すべてに《闇》をもっているという事は知らない・・・混乱を防ぐためだ・・・これもあつて何も知らない報道社がいろんな意味を込めて異能者と呼び始めたが、今はもう一般用語だ

「・・・・・・・・・・警報・・・・・・・・・・異端者か」

警報音により何の警報かを理解し、また仮面と黒ずくめの服を着た

「やつほー、一眠りもできなかったよ。まったくもってめんどくさいなぐぜったい、異端者一体ぐらい出てくるのになんでいちいち撤退するのかな」

「うるさい・・・・・・・・さっきと同じ地域を担当だ」

「うへー五匹もいたんだからこっちに異端者ぜったい多いよ」

「無駄口を叩いてる暇があるならとっとと終わらせてこい・・・・・・・・・・行くぞ」

仮面黒ずくめの二人は走った

0 - 3 異端者

途中で黒ずくめの二人は別れた自分の担当地区へ行くために

「こちらディシクレイト、対象の居場所は・・・ああ、わかった」

言われた場所へ向かっていると銃声が聞こえてきた

- - - - -

「こちら第二十八中隊！異能者はまだか！これ以上は無理だ」

中隊の隊長と思われる人が銃声が鳴りつづける中交信している

「ふざけるな！あんなものどうやって止めるいうんだ・・・..
チツ、くそっ」

通信が切られた

「後退しながら牽制しろ！絶対に近づけるなー！」

「あつ、あつ・・・たすけ・・・」

真つ黒の人型が一人の兵士の腹をえぐっていた

ザクツザクツザクツ

真つ黒な人型・異端者・・・クリーチャーに殺されたり傷つけられることにより人の《闇》が暴走した結果

一人の兵士を腕でえぐっている異端者は右腕が肥大化していて鋭利で大きい爪をもっている

「あいつはもう助からん！撃てー！」

数十人の兵士達がライフルなどで撃つが異端者に当たりはするが弾かれる・・・効いているようには見えない

べちゃ

異端者はえぐっていた兵士を右腕で潰して隊長の方を向いた。銃弾は降り続いている

「くそっ、ばけものが！」

異端者が動き出した……真っ直ぐに隊長の方に……ものすごい速度で

隊長は昔にあった思い出が子供の頃からつい最近子供ができたことまで一瞬で思い出した

隊長の目の前に異端者の右腕が迫っている

ああ、俺は死ぬのか。と隊長が悟った時

ザシュッ

仮面黒ずくめが碧色の刀で異端者の右腕を切断した

- - - - -

間に合った……とまではいえない。見た限り三人ぐらい死人が見える

「雷^{らい}少佐下がって下さい。後は俺がやりますので」

「その声はデイスか、お前が来たのか」

俺は頷いた

「だが、援護くらいは私たちにもできる。それに死なせてしまった部下達の敵う」はつきり言っておく!」・・・・」

「あんた達がいたら邪魔だ・・・・少佐、あんた子供が出来たんだつたよな、親がいない子供の気持ちを考えてくれ」

そう言ったら少佐は何も言い返さなかった・・・・俺の事情を知っているから・・・・

俺は異端者の方に向き刀を構え、消しに走り出した

0 - 4 命を喰らい尽くせ！

異端者は少佐としゃべっている間に腕が治っていた

「・・・・・・・・お前はもう人じゃない・・・・・・・・」

異端者はもともとが人だったものだが言葉になる音はいつさい発しないし、人間らしさは形だけだった

異端者がデイスに向かって動き始めた

武器の右腕を振り回しながら近づいてくるが

・・・・・・・・遅い・・・・・・・・

デイスの相手にはならなかった

向かってくる異端者の右腕が振り下ろされる前に左足、つぎに右足、次に右腕、最後に左腕と順番に切り落とした。

異端者は両腕両足をなくしたがまだ生きている・・・・・・・・異端者は心

臓を完全に消滅させないと永遠に再生し続ける

デイスは動けない異端者の心臓に刀を刺した

「命を喰らい尽くせ！」

刀が刃の色と同じ色、碧色の光を発した

光った所から異端者は黒い粒子になり刀が黒い粒子を吸収していった

これが俺の『力』・・・《命を冒瀆する刀》・・・生命エネルギーを喰ったりその生命エネルギーを使って身体能力をさらに上げたりすることができる

こっちの地区はこの一体しかない

「・・・こちらデイクレイト、対象の異端者は喰った。ピアスの援護は・・・わかったすぐ向かう」

ピアス・・・陽気な仮面の方には異端者が十体いるらしく、すでに三体は貫いたそうだ。

デイスはピアスの担当地区へ向かった

1 - 0 〽復讐 - 強き憎しみ〽

「おい、○○○。×××を連れて逃げろ」

俺の名前と母さんの名前を叫んでいる・・・

「あなたはどつするの?」

「私はここで時間を稼ぐ。早く逃げるんだ・・・君達だけでも生きてくれ」

これは父さんか・・・

「さあ、早く」

「こつちに来なさい×××」

グギユルルル

父の前に五つ無機質な人の顔を持ち黒色の羽を生やし腕には黒い血管が脈打ち・・・・・・・・父をその腕で殺した・・・・潰し

た．．．．．

グチャぐちゃグチャグギョルルル

五つの顔が殺した父を喰った食ったくった．．．．．こっちに顔を向けた

「×××は死なせない」

母は持っていた自動小銃でそのバケモノを撃った、全弾撃った．．．

ケケケケケ、ヒヒヒヒヒ、ニタニタニタニタ、ケタケタケタ

銃で撃たれたバケモノの五つの顔は笑いだした。

そして、近づいてくる

一歩、一歩、一歩、一歩、一歩．．．．．一歩

バケモノは母の前に立った母はもう絶望しきっていたのか動か

ない。

バケモノは腕を振り上げ、下ろす・・・父を殺した腕で・・・

叩く、髑る、髑る、髑る、潰す、喰う・・・

グギユルルル

俺の目の前にくる

バケモノは腕を振り上げる

ドクツドクツドクン

何かを感じた

振り下ろされ・・・

「うあああああああ!!!!」

何かを……いや、『憎しみ』だけが感じた

暗闇に襲われ……

- - - - -

「はっ！」

デイスは目の前に見える天井を何度も見直した

「……………」

自分の部屋だとわかった。そして……

「またあの時の……………」

デイスはこの夢を見るたびに誓う奴は必ず消すと……………
……復讐

「奴はまだ生きている…………俺がかならず……………」

母と父が唯一載った写真を見ていた・・・

「……………」

デイスは三匹目の《バット》を消した

「お前、そろそろその無口やめねえか？こつちまで暗くなるわ」

デイスに話し掛けてきたのはがたいが大きい仮面黒ずくめ……
・名前はスーサイド……《自殺する紋》の《闇》の使い手

「……会話する必要がない」

「いや、まあたしかにそうなんだがこんなにコミュニケーションがないとチームワークが……もとからあんまねーな」

基本、クリーチャーや異端者を刈るのは一人で十分。シユケルと呼べる者は皆十体ぐらいなら普通に刈れる。

今回スーサイドというのはクリーチャーの大型種が出たからである。

「・・・・・・・・先に行く」

「あ、おい待てよ」

対象がいる目的地まであと少し

彼ら二人がいる場所はクリーチャーが大量発生して人が住めなくなつた廃ビル群の中

世界は今多くの場所でクリーチャーが大量発生するポイントが増えている。この廃ビル群もその一つ

「・・・・・・・・いやがるな・・・・・・・・あいつぁ・・・・・・・・《ドッグ》の合成体か？頭が三つもあるぜ」

「《ケルベロス》だ・・・・・・・・最近は出てきてなかったやつだ・・・・・・・・後方支援を任せた」

ケルベロス・顔が三つあるドーベルマンのような犬、大きさが全長3〜4 mと大きい見た目は犬のように見えるが体には黒色が脈動するように纏わりついている

デイスは何もなかった空間から刀を『出し』斬りにかかった

「うおっ、はえーな。んじゃ、俺も準備しますか」

スーサイドもまた『出した』、札を。

- - - - -

ケルベロスは対して強いものじゃないが大型種はいるだけでその周囲にある《闇》が暴走する - - さっき消した《バット》も多分そこらにいた蝙蝠の《闇》が暴走した結果だろう - - ただし《闇》を制御したシユケルは暴走しない。

俺はまずその三つの頭のうちの右側を首元から斬った。黒色が飛び散り《ケルベロス》の頭が一つ落ちる

《ケルベロス》は唸りを上げ口から火を吐いた

《闇》にはファンタジーめいた部分が多くある、火をだすしか、雷をだすしかり。《闇》には能力がある、例えば

デイスの後方から《ケルベロス》に向かって炎弾が飛んでいき

当たった

バックアップしてくれるスーサイドは札を利用し炎弾や雷弾などを撃てる

《ケルベロス》に炎弾が当たったが怯みすらなかった

「スーサイド！火は効かないぞ！」

俺は大声で言った

次に雷弾が飛んできた《ケルベロス》の真ん中の頭に当たった

・・・怯んだ！

俺はこの隙を逃さなかった。すかさず近寄り今度は怯んでいる真ん中の首を斬り落とした

《ケルベロス》はもはや間抜けな格好になっていた左よりな頭が一つだけ、見た目バランスが悪い様

雷弾が連射されいろんな箇所命中、デイスもその中最後の首を斬り落とした……。……がこれだけではまだ終わらない《闇》に蝕まれた元生物は核コアとなる部分を破壊しなければ殺したことになる、コアを破壊せずにそのままにしておくこの《ケルベロス》の場合首が三つとも三日ぐらいで再生するだろう

俺は《ケルベロス》の腹を刻み始めた……。……見えた！

脈動する心臓のような物これがコア、コアはたいていその対象の中心部分にある

「喰らい尽くせ！」

コアに刀を刺す

《ケルベロス》は霧散していった

「スーサイド、帰るぞ」

「ういゝつと」

《闇》が人類を補助し、暴走し、喰らい、襲い、《闇》がすべ

てに成りつつあるこの世界……人はこの《闇》に對しどこへ
向かうのか、破滅か？……まあ、俺には関係ない。俺はた
だの復讐者、奴を消すだけだ。

1 - 2 お、まさかの潜入捜査か

ピーーーーーガチャ

「・・・了解、今すぐ向かいます」

部屋を出て、俺の所属するロストの対異生物排除部隊第三師団の教官及び司令官・・・つまるところの上司の部屋へ行った。

コンコン

「ディシクレイト、ただいま来ました」

「入れ」

ドアを開け部屋へ入った。書斎のよいな部屋、一つだけ大きなデスクがありそこに一人の女性が椅子に座っていてデスクの前にピアスが立っていた。

「少佐、用件はなんでしょうか」

「そうそう、デイスが来たんだからそろそろ教えてくれてもいいんじゃない？」

「・・・・・・・・・・は」

「うわっ、いきなりため息。良い予感がまったくしない」

「ピアス、さすがの私もうるさいと思うわ・・・・・・・・・・では、本題にはいるわね。まず、これを見て」

差し出されたファイルを見た。ピアスは「そういうのは全部デイスに任せた」という訳で見えていない

・・・・・・・・・・これは

「今回の任務理解したか？ああ、ピアスお前は黙っている」

「要するに、シユケルになりそうな奴を見つけて引き込め、ということですか」

「え、シユケル増えんの？やったじゃん。最近死ぬ奴増えて人手不足だったし、ラッキー」

「黙れと言ったはずだがピアス？」

「ういーっす」

「だが、少佐これを見る限り一般市民区の高等学校ですが、どうやって調べるつもりで？」

「お、まさかの潜入捜査か」

「・・・・・・・・・・」

「え、まじ・・」

「お前達の任務を言おう、明日よりお前達二人は銀零高等学校の生徒としてシユケル候補二人を見つけ報告しろ。必要な物はすでにお前達の部屋に運ばれているだろう・・・・・あれだ、任務が終わったら何か奢ってやるから頑張れ」

「・・・・・・・・納得は、いかない」

「失礼ですが少佐、私は今回の任務を辞退させて頂きたい」

「何故って、復讐以外に興味がないからか」

「はい」

俺は、肉親を殺した奴の復讐のためにここに所属した。シユケル探しは確かに発見したら効率を上げたり『組織』にとっていいことだが

「おい、霜時そうじちょっと耳貸せ」

霜時は俺の名前だ。ちなみに俺を名前で呼ぶ奴は雷少佐とそこにいる上官とピアスぐらいだ。

「なんでしょうか」

「いいから早くこっち来い」

しかたないので近づいた。顔が近づき耳元で言われた。

「これは、最近聞いた話だがどうやらお前が追っていたクリヤーこの周辺で一件被害が出たらしい。……優先はシユケル候補探し、もし、一般人に危害が加わるような事が起きれば殺りに行っていい、引き受けてくれるな？」

引き受けてくれるな？、の部分だけはピアスにも聞こえる音量で言った。

「はいっ！」

- - - - -

「は……い、席に着けー。おい、伊東早く席に着け。……
・今日は転校生が二人入ることになった。入りたまえ」

一人は目つきが少し鋭い黒髪の人、もう一人はいかにもだらし無い雰囲気漂っている茶髪の人。どちらも男

「影宮霜時君と一瀬茜君だ。質問とかは休み時間にでもしてくれ。じゃあ影宮君はそこで、一瀬君はそこの席だ」

影宮という転校生が私の隣に来た。隣の席な訳だが、何の挨拶も無しに黙々と席に座った。何か一言ぐらいないのか！と思ったが

まあいい。どうせこれから隣の席にいるのだから会話ぐらいあるだろう。ああ、私か？私は綾瀬憂希^{あやせ ゆうき}2・B出席番号2番だ。暇な学校生活だったが転校生が二人もしかもしかも二人共うちのクラスとはラッキーだ。この二人について調べたら面白いかもしれない。

- - - - -

「どこから来たの？」「名前なんて言つの？」「好きな食べ物は？」「好きなタイプは？」

・・・うるさい。

今は昼休み、霜時は2・Bの女子達に質問責めを受けていた。もちろんどれとて答えていない。が、かわりに

「君みたいな子、オレタイプだな。どう？オレっちと付き合いわない」

茜が女子達と話まくっていたわざと霜時の席で。

キヤアキヤアうるさい・・・

霜時は席を立つてその場を離れた。

「あんりゃー、やっぱデイスには合わないか」

茜は誰にも聞こえない声をつぶやいて霜時を見送った。

- - - - -

霜時は、どこか静かな場所はないか？と廊下を歩いていたら

「キャッ！」

誰かとぶつかってしまった。霜時は周りが見えていなかったの
でまったく反応できなかった。見ると本が散らばっているのと床に
座っている女子がいた。

「すまない」

霜時は自分がやったことをいち早く理解し散らばった本を集め
た。本を積み上げると結構な量だった。

「すいません、私も前が見えなかったので、ではありがとうございます。」

その女子が本を持ち上げたら本で前が見えなくなりフラフラ歩き始めた。

「・・・・・・・・・・はあ」

霜時はその姿を見てしまい、見捨てて行く気にはなれなかった。その女子の元まで行き持っていた本の七割ぐらいを持ってやり

「どこまでだ？」

「ふえ？」

いきなり視界が良くなったのと荷物が軽くなったことで変な声をあげた

「え！、いやいいですよ手伝ってくださいさなくても」

「かまわない。どうせやることはなかったからな」

「でも・・・」

「だったら早くどこまで運べばいいか教えてくれ。さすがにこれをずっと持ちつづけるのは嫌だからな」

「・・・・・・・・わかりました。こっちです」

女子について行き、着いた場所は図書室。まあ当然と言えば当然だ。本を運んでいる時点でだいたいどこかは予測がつく。運び終え

「ありがとうございました、えーっと名前聞いてもいいですか？」

「影宮霜時だ」

こいつの質問は不愉快には思わなかった。

「私は1 - Aの篠原結衣しのはら ゆいです。改めて影宮さんありがとうございました。」

頭を下げられる。

「いや、言ったとおりやるのがなかったから手伝ったまでだ。気にするな」

「それでもありがとうございます。」

切り出す方法が思いつかなくこの状況で抜け出せない霜時、

「あら？影宮君じゃないか。シノもあらあら？」

が一人の女子が入って来たことにより空気が変わった。

1 - 2 お、まさかの潜入捜査か（後書き）

いきなりの学校、化け物との血生臭い闘いばかりかと思ったたらあら
びつくり。自分ですら予想外の展開に！

1 - 3 馬鹿か

こいつは確か俺の隣の席にいた・・・綾瀬憂希だったか？

「あ、ユキちゃん先輩」

「シノ、影宮君と知り合い？」

「影宮さんに本を運ぶの手伝ってもらったんです。」

「ふーん、影宮君はそういうキャラか、もう少し一匹狼かと思っただけ・・・ブツブツ」

何やら綾瀬憂希は一人で何か言い始めた・・・教室に戻ろう。

霜時が図書室から出て行こうとしたら篠原結衣にブレザーの袖を捕まれた。

「あ、あの・・・何かお礼とかさせてください！」

この子はまださっき手伝った事を気にしているのか・・・

「いや、必要ない。あれは俺が勝手にやったことだ、礼をされるほどではない」

「それでも・・・何かさせてください！」

「いいじゃない、別に減るもんじゃないんだし」

綾瀬憂希がまたいきなり会話に入ってきた。

確かに減るものではないが特にしてほしいこともない。無言になつた俺にまた綾瀬憂希がしゃべりだした

「じゃあ、あれだシノ。お礼にクッキー作ってあげなよ。それならいいでしょ？影宮君。」

それで今の状況が解決するのならかまわない。俺は頷いた。

「はい！じゃあ明日作ってきます。」

「あ、じゃあ私の分も・・・」

「本運び手伝ってくれない人にはあげません」

「えゝ、いいじゃない。一つ作るのも二つ作るのもかわらないでしょ」

いや、一つと二つは違うだろ、と思いながら図書室を後にした。

- - - - -

俺とピアス・・・酋は寮に入ることになった。

「ねゝデイス、これ見つけれれると思う?」

見つけれれるというのはシュケル候補のことだが

「どうだろうな」

学校の全校生徒は各学年250人ぐらいの約750名、この中からたった二人の人を探さないといけない。しかも、手探り状態で。

今のところシユケルを完全に見つける方法はない。この学校にいる事がわかったのは探索に長けたシユケルが《闇》を誰かがこの学校で使ったのを確認したからだ。この探索も対象が《闇》を使用している間しか探知できないそうだ、付け加えると探索に長けた連中には一人一人《闇》の質が違うらしい。これによりシユケルが二人いることが判明したわけだが

「じゃあ、俺は先に寝る」

「えゝ久々の市民区じゃん、遊ぼゝぜゝ」

・・・・・・・・うるさい。

こいつと相部屋になったのは確実にミスだと思う・・・・・・・・
・まあ、俺が復讐に駆られてどこかいかないように監視の意味もあるだろう。・・・・・・・・

俺は目をつむりそのまま意識が遠のいていった。

- - - - -

「おい、起きろ！酉！」

ふざけるな、何故こいつはまだ寝ていやがる。現在AM8:00

歩いてすぐだからといってもまだこいつは寝間着状態。学校へ行く準備をしたら間に合わない時刻だ

揺する、布団を剥がす、蹴る、殴る……水をかける

「うえうえう!？」

水をかけてようやく意味のわからない言語とともに起きた。

「うおっ!なんか全身が濡れてる!あ、腹痛い。いや、体のあちこちがいった!」

……もう面倒見きれんな。このまま付き合っていると俺が遅刻する。

「酋、俺は先に行く」

「は?え?オレ今どんな状況?げ!もうこんなじか」

まだ騒がしい奴の言葉を聞かずに学校へ向かった。

- - - - -

学校の授業は四限目に入り、これが終われば昼食・・・まだ酉は来ていない・・・あいつは馬鹿か？・・・馬鹿だな。

「ねえねえ」

それにしても授業とはなんて意味の無いものだろ「気づけよ！」
・・・隣の綾瀬憂希に話かけられていた。

「・・・なんだ？」

「シノからクッキーもらった？」

・・・ああ、昨日の篠原結衣の礼がしたいというやつか。

「いや、まだだが？」

「そう……まさか、渡す気無くなったとか？影宮さまあ」

なにかまた独り言を言い始めた。なにやら俺の悪口を言われたように聞こえたが気のせいだろう。

キンコーンカーンコーン

授業が終わった……酋の奴はどうするつもりだ

- - - - -

「あれ、どこだここ!？」

おっかしいな。さっきまで学校見えてたのにどこいったんだ？

「こっちな？」

- 酋、学校とは逆方向進行中 -

1 - 3 馬鹿か（後書き）

まさかの酋、方向音痴。次の話で学校につけるかな？
そして憂希の「影宮さまあ」みんなの言葉を代弁してくれた！

1 - 4 影宮めシノは私の嫁！（前書き）

あれ？これこんなにノリが軽い話だったっけ・・・

1 - 4 影宮めシノは私の嫁！

キンコンカーンコン

授業が滞りなく終わった。今日の霜時の予定はここに来た理由の
とおりシュケル探し……だが

ブーブー

携帯のバイブレーションがなり携帯を確認する。

『銀零高等学校より東3km地点に《マウス》二体および
《ドッグ》三体出現。至急対象を抹殺せよ』

シュケル探しと同時にクリーチャーの殲滅も行わなければならない。
ない。

……行くか

「あ、ちょっと。影宮君どこいくの？」

綾瀬憂希に止められたが「じゃあな」と言っ
て俺は現場へ向かった。

- - - - -

「いや、影宮君さ。何か用事があるようだからもう帰ったよ」

「え……そうですか」

シノはしょんぼりした。そんな姿は私のハートをブレイクする
！！！！はっ！落ちつけ私

「まあ、あれよ。今日はダメでも明日があるじゃない」

「……………そうですね。明日こそクッキー渡します！」

ちっ、諦めるよ。影宮めシノは私の嫁！

「で、今日焼いた分のクッキーどうするの？」

くれっ、さあ私に渡すんだ。

「友達にあげてきます。」

がはっ！・・・なん・・・だと・・・

「・・・・・・・・・・そう・・・・・・・・」

「あれ？どうしたんですかユキちゃん先輩？」

・・・・・・・・この心配してくれる時の上目使い・・・・・・・・たまらん・
・・・待て、今襲っちゃだめだ

「なんでもにやいわよ・・・・・・・・・・それよりも今日
の部活どうする？」

「休ませてもらいます。材料買わないと、なんで」

・・・・・・・・・・は？材料？・・・影宮のためのクッキーか！くそつ、
影宮め。私だってシノに私のためにクッキー焼いてくれることない
のに！！

- - - - -

「うっ
」

なんだ？さっきから悪寒が……何かこの先にあるのか？
まったくいい予感がしない

《闇》による身体強化によりかなりの速度で移動している。携帯を取り出し

「おい、ピアス今どこにいる」

『あ、デイス！いんやゝここどこか分かんかったんだけどなんかねゝついさっき目の前にいた《マウス》を二体ぐらい刈ったんだよ。で、ここってガッコーから東3km地点なんだね。ははははは……』

「……………」

こいつ、そんなところにいたのか……

『でさゝ、もう《ドッグ》後一体しかないから、デイスは……

・・よつと・・・殲滅完了。でさー迎えに来て「断る！」えつまじ
たすけ」

通話を切った。またブザー音・・・ピラスからだ

俺はそれを無視して寮へと足を向けた。

-
-
-
-
-
-

「でさー酷いんだよ。デイスがさ」

『いや、お前も何をしている。聞く話によると寝坊したあげく
学校にもつけずさらには迷子か！・・・まあ、そのおかげで今回
のクリーチャー殲滅にはすぐ解決したからいいものの』

今通話している相手はデイスとピラスの上官、ピラスが愚痴&
amp;道教えて、のために交信した。

『で、言ったとおり動いて寮にちゃんと着いたか？』

「オッケー、ばっちり、ていうかももう天才じゃね！」

『いや、お前が馬鹿なだけだ』

- - - - -

「とまあ、今日学校いなかったのはそういうわけだよ」

「俺からも言わせてもらおう・・・馬鹿か」

酋、帰還後。霜時による説教がはじまり、酋のいいわけ、そしてまた一日が終わった

- - - - -

キャラクター名

影宮霜時
ディンクレイト

職

《闇》使い（武器形状：剣）

コマンド

蹴る

殴る

▼水をかける

剣で斬る

酋に水をかけた。

「うえうえう！」

酋は奇声とともに目覚めた

m i s s i o n c o m p l e t e

- - - - -

「てかさゝもうちよつと普通に起こせないかな」

「俺は悪くない。お前が朝自力で起きれば俺だってあんなまねしない」

登校中の会話。

「あゝ迷子になるのも嫌だけど学校もいきなくな〜」

「・・・それには同感だ、だが仕事をこなすためにはやはり学校の中にいることが一番発見する可能性が高い」

「いやだー正論聞きたくないー」

「新聞部、ですか？」

「おう、お前が言う一番この学校の情報が入る部活はあこしかないな。えっと・・・図書室横の会議室Eが部室だ。放課後に行ってみるといい」

「ありがとうございます。失礼します。」

無駄な二日間を過ごしてしまった霜時は学校の情報が入りやすい場所を探しに担任の教師に相談した。

・
新聞部か・・・図書室ならこの前行ったその横の会議室か・・・

- - - - -

あつという間に放課後になり、霜時は酉と会議室Eのドアの前にいた。

霜時がノックした。

「はい、どうぞ」

返事があつたので、入ることにした。

「失礼します。この部活に入部したいのだが……」

綾瀬憂希が篠原結衣の服を脱がしていた。

1 - 4 影宮めシノは私の嫁！（後書き）

憂希さん何やってんでしょね。次回が気になります！
そして、シノは俺のよ（ry

1 - 5 頭が痛くなってきた

「. 失礼した」

俺は扉を閉めた。

「なんで私の服脱がそうとするの!？」

「それはもうあなたが可愛いから。というか愛してる」

「いきなり告白! 私達女の子同士ですよ？」

「愛に性別は関係無いわ!」

「いや、ちょっと落ち着いてくださいユキちゃん先輩」

「.」

「霜時ー助けた方がいいんじゃない？」

「. ここが本当に新聞部か? 俺は道を間違えたか？」

「いやいや、霜時が現実逃避したらもういろいろ終わりだから」

「. 仕方が無い、そう思いながら霜時はまた扉を開けた。

「……………」 「うは~~~~」

半脱ぎ状態の篠原結衣がいた

「キヤアアアア!!」

- - - - -

「いや、うん私も反省してるんだけどね。仕方ないじゃないシ
ノが可愛いすぎるから」

「ユキちゃん先輩・・・それ言い訳にもなりません」

「いんや、ユイちゃんは確かに可愛いよ。だが！オレっちは口
リツ子は対象外がなんだ！」

「……………」

俺はこんな部活に入っているのか？

「あらでもシノが可愛いことがわかるだけ上出来ね。で、影宮君どうしたの？さつきから喋らないけど」

何故だ、俺はどこで間違えた・・・あの教師に聞いたところから間違っていたの「無視するな！」？・・・ああ、また綾瀬憂希が俺に喋りかけている。

「なんだ？」

「なんで私を無視する？まずそこから聞きたいわね！」

まったく何を言っているのかわからない

「ユウキちゃん、霜時は何か考えてると回りの声聞こえなくなるときあるから」

「あ・・・あの・・・」

酋にそんな風に言われた後、俺に篠原結衣が話し掛けてきた。

「これ、この前のお礼です。受け取ってください！」

綺麗にラッピングされた物をもらった。・・・この前？・・・
ああ、あの時のか

「お？霜時何もらっ！えっ？何？愛の告白でもされたの？え？
霜時が？」

なんだ？茜には驚かれるは、綾瀬憂希には何故か睨まれるは、
目の前の篠原結衣は顔を赤くしているは・・・熱か？

「ち・・・ちがいますよ。告白とかじゃないですよ！一昨日本
を運ぶのでじゅ・・・かんだ・・・」

手伝って、と言いたかったのだろう。俺が変わりに代弁した

「一昨日、彼女が本を危なくしく運んでいたので手助けしてや
った。で、お礼にクッキーをくれると・・・綾瀬さんにか？」

綾瀬憂希が物凄い形相でこちらを・・・いやこの貰った物を
見ている・・・

「え？何か？・・・それよりあなたたちうちの部活に入り
たいようね・・・いいわ、ただし！影宮君はシノの半径10m内

に入らないように!」

「……ガキか? さっきからなんだ? 綾瀬憂希に俺は何かしたか? 身に覚えがない……」

「ユキちゃん先輩!」

「あらどうしたのシノ? もしかしてさっきの告白オッケー?」

「ち〜が〜い〜ま〜す〜。なんで影宮先輩にそんな条件つけるんですか? ユキちゃん先輩はそんなことをする人じゃないと思っていたのに!」

「がはっ!」 (憂希です)

「そんなユキちゃん先輩は軽蔑します!」

「ぐふっ!」 (憂希です)

「……頭が痛くなってきた……酋に任せてやはり俺は口ストへ帰ろうか……」

「先輩！」

やはり俺はこんな場所合つはずがなかったんだ今からで「影宮先輩！」……俺は本当に人の話を聞いていないのだろうか

「ああ、すまない。なんだ？」

「ユキちゃん先輩を説得しました。これで影宮先輩も部員になりますね。じゃあ、これに名前を書いてくださいっ」

酋は何故かすでに記入し終わっていた……
……これで、よし……なのか？

まずい、まずいわ。ついシノ涙目に承諾してしまったけど、このまま影宮がシノの近くにいたら間違いなくシノがさらわれてしまう！どうしよう……うん、まずは相手の情報収集からきつとやましい事の一つや二つはあるはず！それに前から調べるつもりだったし。仕方がない情報が揃うまで泳がせておくか。

いやゝ霜時が人助けしてなおかつ少女一人を打ち抜くとは・・・
・許せん！ちきしょーあいつ無愛想だけどルックス悪くない・・・
・っていうより良いほうだからなー・・・オレっちでさえまだ誰
のハートも射ぬいてないのに抜け駆けは許せねー。さて、どう妨害
しようか

- - - - -

うつ、そういえば何で影宮先輩を部員に入れるのに必死だった
んだろ。・・・ダメだ影宮先輩見ると胸がドキドキする。え？
私影宮先輩の事・・・やばい、顔が熱い。どうしよう絶
対いま顔赤いよ

- - - - -

なんだ？綾瀬憂希がさっきから俺を睨んでいるのはわかってい
るが酋が何故俺に殺気を放っている！？・・・篠原結衣がまだ
顔が赤い・・・やはり熱でもあるんじゃないのか？

「篠原さん、大丈夫か？」

「えっ！はっ、はい大丈夫です！」

ぐっ、なんだ？ありえない殺気が……クリチャーの異常種と闘った時よりも重いプレッシャーだと！……こういった時は逃げるに限る

「で、では今日は俺は帰らせてもらおう……では失礼した」

殺気をまだ放っている茜と部屋……会議室Eを出て寮へ帰った。

1 - 5 頭が痛くなってきた（後書き）

あ、れ？

これじゃあただの学園モノになってる！

いや、まあ序盤のシリアスな部分より書いてて楽しいしいいんです
けどね。

感想など待ってます！

これ言うの初めてだな。

1 - 6 「あら影宮君そんなところにいたの？」

「命を喰らい尽くせ！」

霜時は一般市民区でもクリーチャーを殲滅していた。今は午後3時、《ドッグ》を三体刈った。……。高校からは俺だけが出て来た。組織側の手回しによって母親が危篤状態でいつ死ぬかの瀬戸際……。という設定になっている。長居はしないからいいがこんな理由いつまでもつのだろうか。

- - - - -

「で、今日はロールケーキを作ってみました！」

篠原結衣が部室でロールケーキを出していた。篠原結衣はお菓子を作るのが趣味らしい。毎度部活の際に必ず何か持ってくる……。家庭科部に入った方がよくないか？

「はい、どうぞ」

切り分けられたロールケーキを渡された。

「お？今日はロールケーキ？いいじゃんおいしそーじゃん」

酋はそう言って、手づかみでロールケーキを頬張り始めた。こいつからの殺気はあの日の次の日には消えていた・・・多分寝てる間に忘れたのだろう。

「あら、じゃあ紅茶も・・・準備がいいわね。シノ愛してるわ」

綾瀬結城、篠原結衣のことを愛する女、同性愛者、殺気を放たなくなつたが、「あら影宮君そんなところにいたの？」とか言つてハサミを投げてきたり、「誰がそんなことしたんでしょうね（笑）」とか言つて俺の席の椅子に画鋲が敷き詰められたり・・・俺は綾瀬結城に何かしたか？対したことはされてないので特に俺は何も言わない。

そんな風に、高校に入って一ヶ月が経つた。今だ一人もシユケルは見つかっていない。

- - - - -

んゝ、シノのお菓子に紅茶幸福ね・・・・・・じゃなくて、影宮君の素性がまったく掴めない！私が一ヶ月も調べてるのにまったく謎しかない。こんな得体の知れない奴にシノを近づけてたまるか！って言いたいけどシノから影宮に近づいて行く・・・シノ、

だめ！そっち行っちゃだめ！

「影宮先輩、今日のロールケーキどうです？今までで1番の力作です。」

「ああ、美味しい」

「お口に合ってよかったです」

え？シノなんで顔赤くなってるの？それに影宮なんでシノのお菓子食べてそんな一言しかないの？……影宮の。。。ヤロ
ー！

- - - - -

ゾクッ！

ん！なんだかなりの寒気が・・・風邪は引いてないはずだが？
また、綾瀬結城が俺に殺気を放っている…………なぜ？

- - - - -

んゝ・・・こりや見てて飽きないなゝ霜時は特に色恋沙汰にま
ったく興味ないからなゝだから今の状況になつてんだけど・・・
・あゝこのロールケーキおいしいなゝ

- - - - -

最近私が気づいたことだけど影宮先輩ってかなりモテてる・・・
・この前新聞部で彼氏にしたいランキングを製作したら三位に輝い
た。「一匹狼なところがいい」とか「顔がむっちゃ好みやん」とか
「あの目で睨まれたら絶対に服従する」とかいうコメントをもらっ
た。中には共感でき・・・ライバルはいっぱいいるな・・・
でも部活でいつも一緒だし1番チャンスあるよね！そういえば今は
無いけど、最近まで新聞部の入部希望者が増えたんだけど、もちろ
ん狙いは影宮先輩。ユキちゃん先輩が追い出したのはかつこよかつ
た・・・あれで私のこと襲ってこなかったら尊敬できるんだけどね
後は酋先輩、どうしてか下の名前で呼んでって言われたので酋先輩
で、その酋先輩は何かいつも部室でゴロゴロしてる。たまに影宮先
輩やユキちゃん先輩に「貴様、働け。将来ニート志望か?」「私は
ね、あいつが嫌いだけどねまだ優秀に働いてくれるからいいのよ。
でもね、働いてない人間はね死んでしまってもいいと思うわ」とい
う感じで蹴られてます。あいつって誰だろう?そういえば影宮先輩
と酋先輩が入ってからもう一ヶ月も経つたんだ。

- - - - -

一人も見つからないか・・・組織はこの状態をどう見ている?

「よし朝のホームルーム始めるぞ」

今は学校でホームルームが始まった。

「今日はサプライズ！転校生がうちのクラスにまた一人増えることになった。」

・・・そういえば、そんな噂があったな。新聞部にいるところ
いう情報はすぐに入ってくる・・・たしか、女だったか？

「入ってくれ、そのさき園崎さん」

「はい、園崎ミチルです。よろしくね」

・・・なんでやつがここにいる・・・酋、開いた口を閉めた方
がいいぞ・・・

「あ！霜時だ」

・・・全員の視線が集まったのだが・・・

「ん？影宮の知り合いだったのか？だったら席は影宮の隣がい
いか・・・おい、そこ開けてやってくれ。じゃあ園崎さん影宮が
いろいろ聞いてくれ。じゃあホームルームは終わりにする。」

・・・厄介なやつが来たな・・・

1 - 6 「あら影宮君そんなところにいたの？」（後書き）

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・

・
・

・

アレ、ナンダコレハコトバガカタコトニ・・・冗談はほどほどにし
て、あんれゝ影宮が妙にハーレム状態になっていく気が・・・

1 - 7 火花が散ったように見えた（前書き）

久々の更新！そして、ぐだぐだ

1-7 火花が散ったように見えた

「なあなあ、霜時。なんでミチル来てんの!？」

「知らん・・・だがまあ俺達が一ヶ月も成果が出せてないかな。探知型のあいつが来てもおかしくはないだろ」

園崎ミチル・俺達と同年代のシュケル、能力は《響く暗線》見えない《闇》で作った系を細かくばらまき自分を中心に半径5kmの円状のレーダーを作れる。系を太くすることにより攻撃にも使えるが距離が離れることに制御できなくなるので遠距離攻撃はできない。

「イヤダ、コワイヨミチルサマゴメンナサイ」(茜です)

何故茜がこうなっているのかと言うと・・・初めて会った時いつものテンションでミチルに話しかけたら半殺しにされそれ以来パシリにされている・・・断って半殺しにされている所を数回みたことがある・・・

- - - - -

・・・今は新聞部の活動で部室にいるのだが

「むー……」

「うー……」

何故か俺を間にミチルと篠原結衣が睨み合っている……何故こうなった？

- - - 昼休み

「霜時、酉と一緒にお昼にしましょ」

「はい、わかりましたミチル様。何か不便がありましたら私にお申しつけ下さい」（酉です）

「ああ、構わない」

こうして、まず昼食でいらない誤解が生じた。

俺と酉はいつも購買で何かを買って食べているのだが今日はミチルが持ってきた三段ある重箱と一緒に食べるために持ってきてくれたのでそれをいただくことにした（どこから出したのか不明何故か持っていた）

で、ここからだ。

「はい、あゝん」

ミチルが俺に卵焼きを口の前まで運んできた

「・・・自分で食べられるんだが・・・」

これを言ったら

「・・・酋、霜時の手足を抑えて」

「サー、イエッサー」（酋です）

俺は言葉の意味を理解する前に酋に手足を縄で結ばれた・・・
《闇》による身体能力強化まで使ってきた・・・そこまで必死なのか？酋・・・

「・・・これで自分で食べられないでしょ？はいじゃあ、あゝん」

・・・これは食べないと昼食は抜きか？縄は・・・ダメだ外せ
そうじゃない・・・しかたない食べるか。

俺は口の前まで運ばれた卵焼きを食べた。

「どう？おいしい？」

「ああ、うまい」

これは素直な感想だ、普通にうまい。

「ねえねえ、あれって今日転校してきた子じゃない？」「あれ
って影宮君？あの二人って付き合ってたの？」「うわっ、ちよつと
あれって・・・」とかなんとか噂されているが俺以外にも酋がいる・
・・・・何故そんな所に縄まで解かれている・・・

昼食を食べていた場所は学校の中心の中庭。人が集まり易くか
つ人目が多い場所・・・ここで俺とミチルが付き合っている説が学
校中に広まった。

「え？あれは影宮先輩と転校生の人？」

現場は知人にも見られている

- - - 放課後

いつもの通り新聞部へと向かおうと教室を出たが

「霜時」
「」

後ろからいきなりミチルが俺の左腕に腕を組んできた。

「・・・なんだ？」

「一緒に帰ろ」

いや、俺は新聞部で情報収集しなければならないのだが・・・
そういえばこいつはなんで来たんだ？

「いや、俺は新聞部へ行かなければならない」

「いいじゃん、一緒に帰ろうよ」
「」

こいつは本当にシユケル探しに来ているのか？

「お前は・・・」

「影宮先輩！」

ん？・・・篠原結衣が俺を呼んだのか

「先輩、一緒に部活行きませんか？」

ちょうどいいところに来てくれた。これで

「霜時、この子誰？」

何だ？このプレッシャーは・・・ミチルからか？いや、篠原結衣からも？

「篠原結衣です。影宮先輩とは部活で仲良くさせてもらってます。」

「ふうん」

なんだ・・・空気が重い？だがとりあえず

「じゃあなミチル、俺達は部活へ行く」

「私も行く！」

「・・・・・・・・」

「酋、いいよね？」

「はいっ、オッケーです！どうぞ来てください」（酋です）

酋居たのか・・・まあ、来ても邪魔にはならないか・・・

この考えが現状を悪くしたがこの時の俺はそんなことになると思わなかった。

-
-
-
-
-
-

はい、回想終了ーようやくオレっちが解放された・・・オレもう帰りたい・・・実家に帰らせて。こんなイジメ堪えきれない！え？オレの出番これだけ？ちょ・・・

- - - - -

今は部室、ミチルは俺の腕を離さない。そして、何故か篠原結衣を睨んでいる。篠原結衣も何故かミチルを睨んでいる。両者の視線の間に火花が散ったように見えたが・・・疲れているのか、俺は？

「あ、そういえば今日はティラミス作ってきたんです。」

篠原結衣はもう家庭科部に入った方がいいのではないかな？

「はい、影宮先輩。・・・すみません園崎先輩、今日来られることを知りませんでしたので先輩の分がありません本当にごめんなさい」

・・・ん？いつもの篠原結衣なら自分の分を渡すと思ったが

「酋！・・・それ私にちょうだい」

「はい、喜んで！」（茜です）

茜・・・普段からそのぐらい行動的でいてくれればいいのだが

「・・・・・・・・」

篠原結衣がやはりミチルを睨んでいるような気はするが、ミチルも篠原結衣を睨んでる？・・・また火花が、やはり俺の目がおかしいのか？

・・・・・・・・

いやゝ影宮君が美少女連れてきたから部屋に入れるの黙認したけど影宮君は何？女たらしなの？シノに園崎さんって影宮君のポジションなんてうらやま・・・ゴホン、まったくシノだけなら（いや、ダメだけど）まだしも転校生をすぐに落とす・・・あれ？そういえば園崎さんと影宮君って知り合いっぽいんだっけ？・・・・・・・・・・・・・
・だったら園崎さんも調査しないと！もしかしたら影宮君のしつぽを掴めるかも知れない。

・・・・・・・・

うわーん！ミチル様が恐いよ。結衣ちゃん絶品スイーツがミチル

様に盗られたー！ダメだ、ミチル様がいるかぎり俺に自由は無い！
・それこれもみんな霜時のせいだー！って今回オレっちがオチ
なの？嫌だ、こんな惨めなオレっちをオチに使うなーそれもこれも
(ry

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6115j/>

世界の闇

2010年10月10日04時00分発行